

検証 JR革マル浸透と組織私物化の実態！

民主化闘争情報 [号外] 2009年4月8日 発行 日本鉄道労働組合連合会 (JR連合) 【No. 2】

暴かれるJR内革マル組織の実態！

JR総連の役員ら50名が、「週刊現代」、および「テロリストに乗っ取られたJR東日本の真実」を書いた西岡記者を相手に、名誉毀損を理由に損害賠償を求めて全国で提訴したが、すでに48件は一審でことごとく敗訴した。残る2件の原告は、松崎氏、JR総連・JR東労組・梁次氏（浦和電車区事件被告）であり、この裁判は現在も続いている。後者の裁判において、JR東労組元中央執行委員で、現在はジェイアール労働組合の本間雄治氏が被告側の証拠として陳述書を提出し、JR内の革マル組織の実態などについて詳細に記載するとともに、3月3日には証人として自ら証言した。

本間氏は、JR東労組の中核にいた人物であり、革マル派に所属しJR内組織「マンガローブ」の一員だったと自ら認めている。松崎氏も1月26日の本人尋問で本間氏が革マル派であったことを肯定した。JR総連・東労組側は本間氏の赤裸々な証言を否定しているが、真実はどうなのか。本間氏の陳述内容を忠実に紹介し、読者の皆様の判断を求めたい。

革マル派組織がJR東労組の方針を決め組織指導している！

本間氏が当該裁判の被告側の証拠として提出した「陳述書」の一部を以下に紹介する。

私は、かつて、JR各社の労働組合の中における革マル派の組織であるマンガローブの一員でした。

JR東労組など、JR各社の労働組合の中に革マル派の活動家が相当数いて、組合員の中から革マル派に理解を示す者を作り出し、同派に同調する者を育成し、最終的には革マル派の同盟員を育てる活動をしていたのは公然の秘密でした。

そのような活動の第一段階として、組合員の中で意識が高いと認められた者たちに、革マル派の機関紙である「解放」を購入させ、その学習会を行うことによって、革マル派の考え方を学んでいきました。この学習会に参加するメンバーは、組織防衛のためとして、本名ではなく、ペンネームでお互いを呼んでいました。

上記の学習会に参加しているメンバーは「L読」と呼ばれていましたが、その中でさらに上位のメンバーとなれると判断された者は、所定の手続（論文の提出など）を経て、「Aメンバー」という段階に所属することになります。A組織は、「RF」と呼ばれることもあり、革命的な組織とされていました。このメンバーは、10人から20人で「A会議」を作り、そこで「マンガローブ」と呼ばれるJR内革マル派組織の指導を受けます。この中で、松崎氏や革マル派の考え方をいっそう注入されるのです。

JR東労組では、Aメンバーやマンガローブによって構成される基本組織メンバーがそれぞれの組織の基本方針を決めていますが、この基本組織を指導するのがLC組織と呼ばれる革マル派の組織です。基本組織は各地方本部ごとにあるのですが、その基本組織を束ねるのがLC組織なのです。

このようにして、JR東労組の中では、労働組合と革マル派の組織が密接に連携しており、労働組合であるJR東労組の活動方針も人事も、革マル派の影響下にあるのです。

